

建物再生、温故知新。

古きを訪ねて、新しきを創る。



平成28年9月3・4日 岩手県公会堂

(公社) 日本建築士会連合会東北ブロック会女性委員会いわて大会

目 次

1	平成 28 年度 東北ブロック会女性委員会いわて大会プログラム	1
2	会場案内 (岩手県公会堂・岩手銀行旧本店本館他)	2
3	懇親会会場案内 (つなぎ温泉 愛真館)	3
4	基調講演	
	① 腰原幹雄氏	4
	「いろいろな木造建築」	
	② 三澤文子氏	6
	「木造建築病理学に基づく木造住宅の改修～地域で活躍する住宅医の育成」	
	講師プロフィール	7
5	ヘリテージ及びリノベーション事例発表	
	① (一社) 青森県建築士会	8
	「何度目かの再生」	
	② (一社) 秋田県建築士会	10
	「明治百年通りにぎわい拠点 旧小坂鉱山配電所木骨レンガ造移築再生」	
	③ (一社) 宮城県建築士会	12
	「離島の古民家再生に向けて ～古民家の再生を島の活性化に繋げたい～」	
	④ (一社) 山形県建築士会	14
	「産業文化遺産で映画を楽しむまち鶴岡」	
	⑤ (公社) 福島県建築士会	16
	「歴建 ～故きを温ねて新しきを知る～」	
	⑥ (一社) 岩手県建築士会	18
	「古民家の改修・人とひとを繋ぐ」	
6	懇親会プログラム	20
7	懇親会参加者名簿	21
	
◆	エクスカージョン	
	盛岡鉦屋町 町屋散策	22

平成 28 年度 東北ブロック会女性委員会いわて大会 プログラム

■テーマ 建物再生、温故知新。古きを訪ねて、新しきを創る。

■日程及び会場

●平成 28 年 9 月 3 日 (土)

10 : 30 ~ 12 : 30	見学会	於 : 岩手銀行・岩手県公会堂 レストランにて昼食
12 : 30 ~ 13 : 00 ~	受付開始 開会 主催者挨拶 来賓祝辞	於 : 岩手県公会堂
13 : 20 ~ 14 : 15	基調講演①	腰原 幹雄 氏
14 : 15 ~ 15 : 10	基調講演②	三澤 文子 氏
15 : 10 ~ 15 : 20	～休憩～	
15 : 20 ~ 16 : 50	ヘリテージ 及び リノベーション 事例発表 (青森県) 加賀沢 香、(秋田県) 柳谷 節子、(宮城県) 遠藤 陽子 (山形県) 芝田 清子、(福島県) 酒井 美代子、(岩手県) 長澤 紗織	
16 : 50	閉会 ～移動～	
18 : 45 ~ 21 : 00	懇親会	於 : つなぎ温泉 愛真館

●平成 28 年 9 月 4 日 (日)

6 : 30 ~ 9 : 00	朝食 (※7 : 30 ~ 9 : 00 委員長会議)	
9 : 30 ~	宿舎出発 ～移動～	
到着 ~ 11 : 30	盛岡鉤屋町 町屋散策	
11 : 30 ~ 12 : 30	昼食	於 : ステラモンテ (あさ開酒造内)
12 : 30	解散	

(敬称略)

会場案内

■ 講演会会場

岩手県公会堂

平成18年より 登録有形文化財として認定

〒020-0030 岩手県盛岡市内丸11番2号 TEL: 019-623-4682

竣工: 昭和2年6月15日

敷地面積: 4,088.36㎡ 建築面積: 1,593.38㎡ 延べ面積: 3,589.25㎡

最高高さ: 24.24m 構造: 鉄筋コンクリート造スクラッチタイル張

設計者: 佐藤功一博士 (元早稲田大学建築学科主任教授)

岩手県公会堂



■ 町中ウォーク

岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館

平成6年12月27日 国指定 重要文化財(建造物)
〒028-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通一丁目2番20号
建築面積: 693㎡
構造: 煉瓦造二階銅板葺
設計者: 辰野金吾(辰野・葛西建築設計事務所)

岩手銀行(旧盛岡銀行)旧本店本館



もりおか歴史文化館(旧岩手県立図書館)

〒028-0871 岩手県盛岡市内丸1番50号
設計者: 菊竹清訓
1967年: 旧岩手県立図書館 竣工 開館
2005年: 同上 閉館
2008年: 盛岡市へ譲渡
2011年: 増改築し、もりおか歴史文化館として開館
構造: RC造(地上2階、地下1階)
延べ面積: 4,676㎡

もりおか歴史文化館(旧岩手県立図書館)



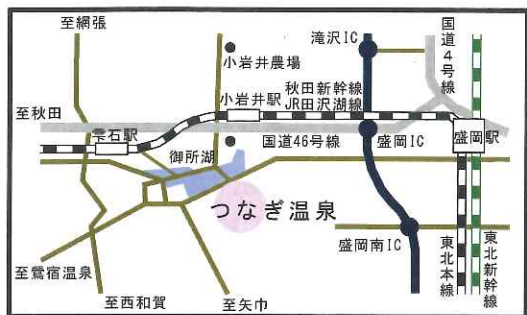
懇親会会場案内

■ 懇親会会場

つなぎ温泉愛真館

〒020-0055 岩手県盛岡市繫字塗沢40-4 TEL:019-689-2111

「お風呂のはしごもいいもんだ 18種の湯殿を堪能する湯めぐり宿」
NHK朝の連続テレビ小説「どんど晴れ」にて老舗旅館のお風呂の舞台となった「庭園縄文露天風呂」が自慢



つなぎ温泉 →



つなぎ温泉について

平安末期の康平年間（1058年～65年）源義家が安倍貞任を攻めた前九年の役で本陣を「湯の館」（繫温泉南方山麓）に置いた。

この時、義家は温泉が湧いているのを発見し、愛馬の傷をこの温泉で洗うと快癒したため、愛馬を穴の開いた石に繫いで、義家も入浴したと言われる。

以来、繫（つなぎ）温泉と呼ばれるようになったとのこと。

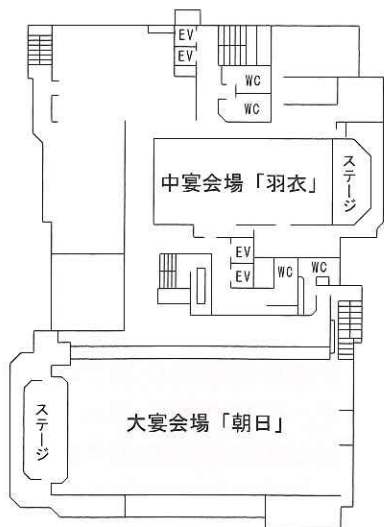


盛岡駅西口行き無料シャトルバス

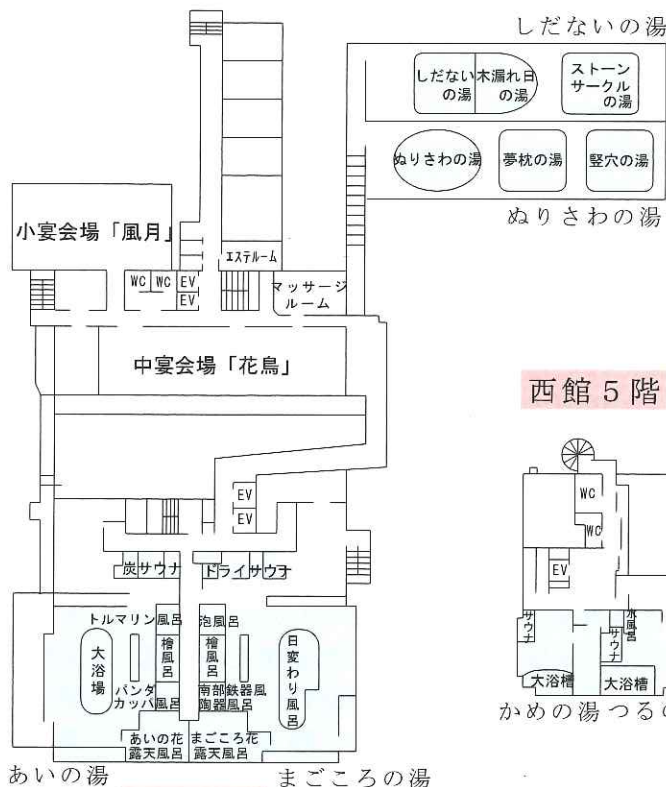
愛真館出発時刻

9:30 11:00 15:20

※ホテル紫苑からの乗客も同上のため
人数制限の可能性あり

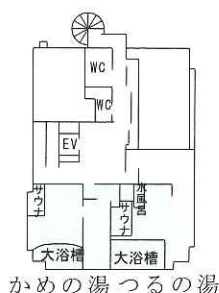


別館 2階



別館 3階

西館 5階



かめの湯 つるの湯

「いろいろな木造建築」

東京大学生産技術研究所
腰原 幹雄

木造建築というのは不思議なもので、木造建築を専門にしている人は「木造建築は難しい」といいがちであるが、一般の人からみれば、木造建築は簡単そうで自分たちでもできるのではないかと感じる最も身近な建築でもある。

木造建築の専門家が、難しいというのは、ばらつきや欠点のある自然材料である木材を建築の構造工学の中で扱わなければならない点があげられる。しかし、もっと難しいのは、構造工学に基づく建築ができる前から、経験学としての試行錯誤のなかから進化をしてきたという伝統文化の側面を持っていることである。一般の人が、身近に感じるということは木造建築に対して何かしらの思い入れがあり、「日本の木造建築は、こういうものである」というイメージを誰もが持っているからであろう。

つまり、人それぞれでそれぞれの価値観に基づいたいろいろな木造建築があるのである。

今回は、少し変わった価値観から木造建築を考えてみる。

■なかなか遺産

法隆寺、姫路城、京都、奈良、白川郷の合掌造など伝統木造建築は世界遺産として評価されているほか、国宝、重要文化財などさまざまなかたちでその価値が評価を受けている。しかし、大事にしたい建物はそれだけではないはずである。地域に残る建物は、建物単独の価値だけでなく、その場所での建物の役割、そこで生まれた人の結びつきなども評価されるべきである。そんな価値観から生み出されたのが「なかなか遺産」、どこにもない特異性をもち、一度見ただけでくすっと笑っちゃうことから、国の重要文化財や世界遺産に認定はされないものの、でも、生真面目に、地域やそれを越えた地球上の環境やひとや社会やいろんなものを結びつけ、なかなか！と見るひとびとを唸らせ、建造物のみな

らず、そのつながり全体を劣化させずに次世代に思えてしまう遺産であり、その保全方法も、頑張りすぎない「そこそこ保全」で十分である。飾り物の建物ではなく、さまざまな形で実際に活用しながらその価値を引き継いでいかなければならない。

■近代木造

なかなか遺産の不思議な外観は、新しいことへの挑戦から生まれていると思われる。

社会が変わって新しい用途、規模の建物が必要となったとき、現在持っている技術から工夫してつくりあげられた建物、発展途上の挑戦がどこか微笑ましさをもっているのだろう。技術が成熟すれば、構造的に合理的な姿になり、トラスやブレースといった構造システムとして表現される。1900年ころには、新興木構造、近代木造として工場や倉庫などの大規模な木造建築が登場する。しかし、その姿は「ずんぐりむっくり」として、伝統木造の姿とはまったく異なるものになっている。

■都市木造

現在、注目されている都市木造もまだまだ発展途上の木造建築である。都市といえば、鉄筋コンクリート造、鉄骨造のビル、木造といえば、郊外の住宅や学校といったように、都市と木造の組み合わせは、これまであまり考えられなかった。森林資源の有効活用による供給拡大から新たな需要として都市木造が注目を浴びている。

新しい建築のためにはビジョンを共有することが重要である。そのためには、未来の都市木造の街並みを想像して価値観を共有していくことが大切である。2010年にteam Timberizeが提案した「表参道を木造の街並みにしたら」も、決して夢物語ではなく実現できるかもしれない。

■さまざまな木

日本には、法隆寺をはじめとすれば1400年以上の木造建築の歴史がある。しかし、私たちは1400年前と同じ暮らしをしているわけではなく、1400年前と同じ森林資源を有しているわけでもない。であれば、現在の生活スタイル、社会システムにあった木造建築を考えていく必要がある。伝統木造の文化に尊敬の意を持ちなが

らも、そのままではない木造建築を考える必要があるはずである。

自然材料である木を使った建築と考えたときには、これまでの木に対する価値観も変えていかなければならない。キーワードは、

- ・間伐材と主伐材
- ・住宅用流通規格材と太い材
- ・再構成材と接着剤
- ・細い木
- ・曲がり木
- ・低ヤング率材
- ・さまざまな樹種、広葉樹
- ・無節、柾目
- ・被害木

である。森林にあるさまざまな資源を人間が工夫して使っていくことに価値があるはずである。

■白木と塗り

現代の木造建築では、素地仕上げ、クリア塗装が好まれる傾向にあり、日本は白木文化という声も聞かれる。白木の木造建築として真っ先に思いつくのは伊勢神宮だろう。しかし、伊勢神宮は20年間隔で遷宮を行う建築であり、20年間の耐久性が要求されている。自然な経年変化がむしろ望まれているのかもしれない。伝統木造建築でも、高い耐久性を求められる場合には、丹塗りや漆塗りなどの彩色が施されている場合がほとんどである。耐久性を考慮しながら木材の表面仕上げ、塗装についても再考していく必要があるのではないだろうか。木目の見えない木でも木を感じることができるはずである。

■経年変化、メンテナンス

木造建築は耐久性が不安視されがちである。確かに、腐ったり、シロアリの被害にあったりして数十年でぼろぼろになってしまう木造住宅もあった。しかし、1000年以上前の建築が現存しているという実績があるのも木造建築である。木材自体に問題があるのではなく、木の使い方、メンテナンスの仕方が木造建築の耐久性を左右しているのである。現代の工業製品は、変化しないメンテナンスフリーな材料を目指して開発を進めている。変化しないといっても全く変化しないわけではなく、変化の速度をできるだけゆっくりさせているに過ぎない。一方、木材は

経年変化が比較的大きい材料である。しかし、経年変化には悪い方向に変化する「劣化」と良い方向に変化する「味わい」がある。木造の場合には、うまく経年変化をすればこの味わいを増すことができるのである。伝統木造建築の町並みの魅力は、こうした建物に刻み込まれた年月でもあるはずである。他の工業製品とは違う価値観で変化する材料を見直してみる必要がある。また、こうした味わいを増すためにはメンテナンスが重要である。手入れをしなければ簡単に劣化するのも木材である。メンテナンスというと大がかりなことをイメージするかもしれないが、木造建築であれば、大きさが大きいだけで木造住宅とあまり変わらないだろう。日曜大工やDIYの延長として建物を使用する人たちが、自分の建物に関心が高まり、さらに手を入れ愛着をもって大切に使うといった好循環を期待したい。

■つるつるとざらざら

福島県西白河郡矢吹町では、東日本大震災の復興で現代木造建築による街づくりが始められている。自然材料である木材を用いた街並みでは、軒や屋根の水平線、柱や建具の垂直線、庇やデッキによるでこぼこの境界線、使用材料のざらざら感など、鉄とガラスでかたどられた、つるつとしてシャープな現在の風景とは異なるさまざまな表情が実現可能であり、この特徴を生かした街並みを楽しめるようになりたい。「魅力ある木造建築を建てたら実は日本の森林資源のためになっていた」というのが理想である。そんな世界になるためにも、決してすべての建築を木造にするということではなく、木造建築に適した建築を、魅力を伝えられる建築を木造にしていくことが大切であり、こんな建築が木造だったらいいのにといい夢を一步ずつ実現していかなければならない。

「木造建築病理学に基づく木造住宅の改修

～地域で活躍する住宅医の育成～」

岐阜県立森林文化アカデミー客員教授

三澤文子

もはやスクラップアンドビルドの時代は終わり、これからの時代のすまいは、手入れをしながら大切に住み継ぎ、住宅の長寿命化を目指す必要があると考えます。そのためには私たち建築専門家は、「既存住宅を壊し建替える。」という結論に促すのではなく、「既存住宅の寿命を延ばすことを目的とした適切な改修」を勧める姿勢が必要です。その「適切な改修」こそ、既存住宅の問題点（病理）を把握し、それを治すといった、いわば治療としての改修なのです。治療としての改修には確実な調査診断が必要です。この調査診断を怠った改修では、予想外の費用の発生や性能が向上しないなど、様々なトラブルが発生するといった問題が起こってきます。

改修にあたっては、まず物理的に、耐震性能、温熱性能、劣化、設備や配管、バリアフリー、防耐火性能等の項目に沿って調査診断を行い、現状を把握します。そしてこの調査診断結果に基づき、さらに依頼者の生活スタイルや予算などの条件を把握して、もっともふさわしい改修プランを提案することができるのです。

既存住宅の現状を把握する調査診断技術を学び、さらに改修設計施工技術に優れた「住宅医」の存在が今、注目されています。既存住宅を新築住宅に近い性能に向上させるためには高い知識と技術そして実践力が必要です。私たちは、このような人材を育成するために、2009年より「住宅医スクール」を開講しています。住宅医スクールでは、英国で学問体系として歴史のある「建築病理学」に基づき、住宅医の育成に努めています。

さらに、単に知識だけでなく、分析力、技術力、実践力が備わっていると認められたスクール修了生を「住宅医」として認定しています。

この住宅医による調査診断・改修が広まり、住宅医が地域で活躍すれば、歴史ある街並みや情緒ある古家がむやみに壊されることなく、設計者の無

知が生む不適切な改修工事で、被害をこうむる住まい手も少なくなるでしょう。治すことは、つくることより数段難しいということを実感していますが、治すことこそ、創ることだ。との手ごたえもあります。今こそ「治す力」を備えた「住宅医」が求められていると思うのです。

基調講演講師プロフィール

■腰原幹雄氏



- 【経 歴】 1968年 千葉県生まれ
1992年 東京大学建築学科卒業 同大学院に進学
構造設計集団<SDG>
2001年 東京大学大学院博士課程修了
現在 東京大学生産技術研究所教授
NPO team Timberize 理事長
- 【構造設計】 金沢エムビル、油津運河夢見橋、幕張メッセバテストアブリッジ
八幡浜市立日土小学校耐震改修、下馬の集合住宅 など
- 【著 書】 『都市木造のヴィジョンと技術』、『現代木造住宅ガイド』
共著『学びやすい構造設計「木質構造の設計」』、『2012 木造
住宅の耐震診断と補強方法』、『日本木造遺産』
- 【受賞歴】 2010年 土木学会デザイン最優秀賞（油津 堀川運河）
2012年 日本建築学会賞
（業績：戦後木造モダニズム建築としての八幡浜市
立日土小学校の保存と持続的活用）
WMF ノール・モダニズム賞
（世界のモダニズム建築の最たる例として、「八幡浜
市立日土小学校」の修復・保存・再生に大きな
役割を果たした建築家コンソーシアムの一員として）

■三澤文子氏



- 【経 歴】 1956年 静岡県生まれ
1979年 奈良女子大学理学部物理学科卒業
株式会社現代計画研究所 入社
1985年 三澤康彦氏と大阪にて Ms 建築設計事務所設立
林産材と都市の住まい手とを結ぶ活動を木造住
宅設計に取り組み、数多くの「木の家」を設計
1995年 阪神淡路大震災を契機に被災調査活動を共に行
った仲間と木構造住宅研究所を共同設立
1996年 MOK スクールを開催し、現在も継続中
各地の木造塾の立ち上げに協力、この頃より
木造教育に係わる
2001年 岐阜県立森林文化アカデミー教授
～2009年 その後 現在まで 客員教授
2011年 京都造形芸術大学通信大学院教授
～2014年
現在 MSD 主宰
- 【主な作品】 ケナル山荘、白水湖畔ロッジ、日野北の家 など
- 【著 書】 『木造住宅の可能性』、『住宅に空間力を』
共著『民家型構法の家』、『最高の木造住宅をつくる方法』
- 【受賞歴】 2007年 日本建築学会賞教育賞
2013年 日本建築士会連合会賞優秀賞（北沢建築工場）

「 何回目かの再生 」

所 属 青森県建築士会十和田支部
氏 名 加賀沢 香

青森県むつ市大湊地区には、海上自衛隊の大湊基地があります。旧海軍の時代からこの地域に馴染んだ基地で、北海道を含む青森県以北の海域を防衛警備しており、市が名付けた「北の防人(きたのさきもり)」という事業名もここから来ています。

むつ市から『北の防人大湊地区都市再生整備事業』として既存建物の改修・新築・外構整備の依頼を頂いた中に、今回の建物がありました。改修する建物は、海に面した基地と背後の釜臥山の間、広大な水源池公園の一角にあります。記録によると、旧海軍の士官官舎として大正4年に建造され、戦後は海上自衛隊の官舎として改造し使用していました。その後昭和60年にむつ市文化財収蔵庫とするため再度改造しています。二度にわたる改造で、内部は建設当時の面影がなくなりましたが、外観は開口部をふさぐだけで形状は大きく変化していませんでした。



写真1. 士官官舎時の様子



写真2. 収蔵庫時の様子

この建物は、外周りと中央部に釜臥山から切り出された安山岩を乱積みし、木の和小屋を上に乗せて鉄板で葺いた造りになっています。計測と資料により床面積は約283㎡です。

外観は建設当時の形に復原しながらも現代の

設備を備え、現行法に則った建物として市民に開放する、という目的に向かい、文化財建造物保存技術協会の協力を仰ぎながら調査・各設備検討・構造検討・ディテール検討を行いました。

この建物に関する正式な図面は残っていません。しかし幸いなことに、むつ市出身で個人的にこれらの建物を研究していた方の協力を得ることができ、また町道を挟んだ東側の敷地には当時の形状を色濃く残した建物(士官官舎の後に高校女子寮、現在は使用していない)が反転したような平面形で残っていたため、2棟合わせた現地調査を何度も行いました。

その結果、石を積んだ外壁は内外で二層になっており、目地にモルタルを使用していました。内側は積み方が粗く、鉄筋等は使われていません。基礎もなく、地中の碎石から直接石を積み始めていました。また、開口部は多く、コンクリート製のまぐさや窓台に損傷はほぼ見受けられませんでした。和小屋は梁間方向を丸太梁1本で飛ばし、その梁材を桁材で上下に挟み、Φ13のボルトで石積み壁に固定させています。

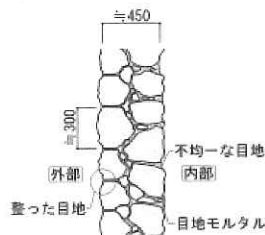


図1. 石積壁の詳細



写真3. 改修前和小屋の様子

この構造は、全国で数々の文化財を調査している文化財建造物保存技術協会の方からも、大変希少なものである、との意見を頂きました。

改修後に市民開放するにあたり、一番の問題は安全性の確保でした。しかし、石積みに対する耐震診断の手法、そもそも構造設計基準そのものが確立されていないため、明確に耐震性を評価することは非常に難しいものでした。

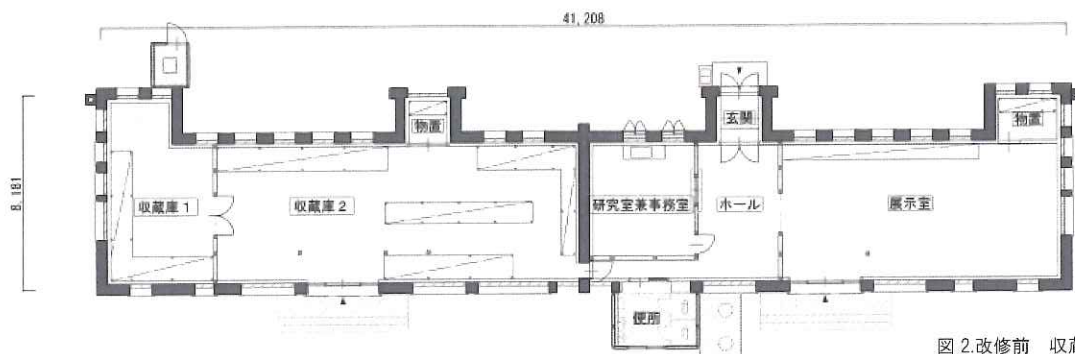


図2. 改修前 収蔵庫平面図